

| | |
|------------------|---|
| Title | ヒットラーとレーム |
| Sub Title | Hitler and Röhm |
| Author | 板倉, 卓造 (Itakura, Takuzō) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 1952 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.25, No.11/12 (1952. 12) ,p.1- 24 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 三十周年記念特別號 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19521215-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヒットラーとレーム

板 倉 卓 造

目次

- 一 第二革命の流言
- 二 レームの素性
- 三 謀叛の同志
- 四 史上の大虐殺
- 五 この大虐殺の讚美
- 六 この大虐殺の合法

一 第二革命の流言

一九三四年の春の頃、ドイツ國內には、ヒットラー政權を覆えさんとする第二革命の陰謀がたくまれていると云う噂が、誰れいうとなく傳つていた。

その陰謀の首魁は突撃隊(S. A.)の參謀長レーム(Röhm)で、部下三百萬を動かして、ヒットラーの身邊に虎の威を假るゲーリングやゲッベルス等の一派を、ナチ黨から一掃し、代つて急進派の手に勢力を占めんとする計畫であると云うのである。この陰謀には前宰相でナチスぎらいのシュライヘル將軍や、曾てのナチ黨の大功勞者で、今は遠ざけられて不平を抱

くと稱せられるグレゴール・シュトラッサーや、現にヒットラーの下に副宰相で、ヒンデンブルグ大統領の信任厚きパーベ
ンなどが加盟し、甚だしきは某國大使（フランス大使フランソア・ポンセのこと）もこれに關係していると、まことしやかに傳
えられたのである。

如何にも當時ナチスの黨内外に分裂の形勢歴然として、黨情殆ど危機に瀕していたことは事實である。内にあつては左右
兩派、溫和派と急造派の勢力争いが露骨で、殊にヒットラー周圍の一派を排斥して、突撃隊の領袖等が取つて代らんとする
野心は、決して噂のみではなかつた。外にあつてはナチス政治に對する民心の期待外れと、就中、教育ある階級の間に、
ヒットラーの片腕たるゲッベルスの專横に對する憎悪が特に激しく、更にナチスへの強制献金の壓迫や、黨人の獵官運動の
醜態が著しく人氣を害して、人心自ら變を望むの情勢であつたのは、事實と信ぜられる。

二 レームの素性

ところで、この形勢に乗じて第二革命をたくらんでいると噂される突撃隊參謀長レームとは、一體どんな漢かというに、
軍隊出身の大野心家で、しかも有名な男色家で（男色の蠻風は當時突撃隊内に一般に行われたもので、醜聞周知の事實であつた。ヒッ
トラー自身の前身も亦そうであつた）、彼及び其同僚は、彼等の權勢を利用して贅澤亂行を恣のままにし、黨金官金を浪費して不
羈放縱の生活を營み、ドイツ國民の中に殆ど鼻つまみの一團であつた。しかも彼等と其配下の關係は、親分子分の親しみ
で、いつも酒場で一緒に呑み合い、亂痴氣騒ぎを演じて日を過ごしていた。元來突撃隊の兵隊の大部分は、無教育な勞働者
上がりであつたから、レームは彼等の間にヒドク心服されていた。

レームの野心は先づドイツ國の正規軍たる國防軍を手に入れて、自己の突撃隊と合體することであつた。ところが其國防
軍なるものは、ドイツの陸海軍を含み、其訓練に於ても、其將卒の素質に於ても、舊プロシヤ陸海軍の傳統を繼いで、最も

嚴肅な軍隊であるから、到底レームの突撃隊などと合體さるべきものではない。殊に國防軍の將校は多くエンカーの出であり、自ら持することの高いものであつたに反し、突撃隊は元々ヒットラーがナチス革命を起すに當り、其手兵として募集した雑兵の集まりであつて、當時これを募集するに、人間の素性は何でも構わず、例えば共產黨でも四週間の訓練で兵隊に作り上げることが出来ると稱して、手當り次第に寄せ集めたもので、それが一九三四年の春には、無慮三百萬にも達する大軍團となつたのであるが、其爲め倉番あがりや、鏡前屋の見習いなどが、一躍佐官ともなり、將官ともなつて、隊長や師團長に起用せられたのである。だから軍隊の素質の悪いのは當然のことであつた。こんなヒドいものの中に、ドイツ陸海軍の古い傳統を誇る國防軍を編入しようと云うのであるから、レームの野望と心臓は大したものであつたと云わねばならない。

しかしそれは大統領ヒンデンブルグ將軍の眼の黒い間は全然絶望であつた。將軍はレームの素性と性行とをよく知つており、殊に彼の變態癖は豫て最も苦々しく思つていたことである。またエンカーの勢力が強く支配する國防軍の領將達からすれば、成り上がりのレーム輩の下につくことは大反對であり、更にドイツ國內の産業家や銀行家は、擧つて國防軍の信賴者であり、またエンカー出身の領將等に對して有力な支持者であつたから、是等金權階級の意に反する行動を取てする危険は、ヒットラーが誰よりも最も恐れる所であつた。

元來レームという漢は、一兵卒から上がった軍人で、第一次歐洲大戰に東西の前線で轉戦して負傷し、鼻の上半部分を彈丸でモギとられた上に、顔面に深手の傷痕を印し、小さな口髭をはやして、豚のような細い目をした背の低い、頸の短い、ずんぐりした、見るから下卑た風貌の男で、生まれつき粗暴、しばしば狼籍を働いた爲め、永く軍務にあつたに拘わらず、最後にやつと大尉で退役したのであるが、早くからヒットラーのナチ運動に參畫し、後年突撃隊の一首領となつたのだから、彼の殆ど全生涯は、兵舎と塹壕に暮らしたもので、それが彼をして男色癖の變態漢にしたのであつた。またその下級軍人の經歷と、卑しい性行と、醜い風貌が、却つてナチ運動や突撃隊の中で、彼をして名物男たらしめたのであつたと評するもの

がある。彼がヒットラーの下に突撃隊の參謀として猛威を振り、ドイツ國中の憎まれ者となつて一生を終つたのは（彼が後に殺されたのは四十七位の歳であつた）怪しむに足らない。

突撃隊というのは、當時誰でも知つていた通り、*Sturm Abteilung* の頭字を取つて、一般に *S. A.* と呼ばれたナチ運動の暴力的主力で、依つて以てヒットラーが成功した彼の手兵である。その素質は前にもいつたように、全國の成らず者をかき集めた無頼漢の集團であつた。茶色の制服を着て、天下を横行したものである。ところがその突撃隊の中には、多數の共產黨や、左派社會黨の赤がいたので（レームは其赤中の最赤であつた）、當時世間では突撃隊をビーフステーキだと綽名してゐた。外側は茶色で中味は赤だといふのである。

レームは實に其創立者の一人で、また其指導者であつた。ヒットラーの成功が彼の手兵突撃隊の暴力によるものであつたとしたら、レームこそ黨中第一の殊勳者の一人でなければならぬ。ナチ運動の最初からレームは實にヒットラーと生死を共にしたものであり、ヒットラーの最初の革命運動たる一九二三年十一月九日のミュンヘン暴動が失敗したとき、レームもこれに加わつて大に働いたのであつたが、一敗地に塗みれるや、首魁ヒットラーは逸早く遁走し、隊長ゲーリングもまた脱走したに反し、獨りレームはとどまつて戦い、遂に官軍の重圍に陥り、その場で逮捕されたのである。それほどに彼はヒットラーに對して最も忠誠な同志であつたから、一九三四年一月三十日附、ヒットラーが彼に送つた書簡中には、レームがナチ運動とドイツ國民の爲に盡した不滅の功勞を感謝して、「君の如き人物を、余の友人として戦友と呼ぶことを許される幸運に對し、感謝する所を知らず云々」と書いていたのである。この書簡はヒットラーがレームを殺した僅々五カ月前に書いたことになるのであるが、このようにヒットラーとの過去十數年來の親交からすれば、レームの功勞に報いる爲に、ヒットラーは彼の親友の志を成さしめることに誠意を盡すべき筈であると、レームは期待してゐたに相違ない。

それ故に一九三三年の暮から三四年の春にかけて、或は國防軍司令官が辭職したり、或は國防相交送の噂があつた毎に、

其後任にレームの名が世上に噂せられ、本人はまた大にそれを當てにしていたのに、其都度失望に終つたのは、彼の大不満を想像するに餘りあることである。ヒットラーとの關係が、だんだん悪くなるに至ると共に、彼がひそかに第二革命をたくらんでいと云うような風説や疑念を起さしめ、殊に彼を好まざるヒットラー側近のゲーリングや、ゲッペルスや、ヒムラー、ヘス等の一派が、彼に不逞の異圖あるように、ヒットラーに吹き込み、ヒットラーをして徐々にレームを除く決心をなさしめたのである。遂にヒットラーをして決意せしめた其結果が、一九三四年の七月一か月を以て、突撃隊の休養日とし、全隊を一時解體する命令を、レームの名で布告せしめるに至つたのである。それは同年四月二十一日であつた。この命令は固よりレーム自身の發意によるものではなく、ヒットラーから強要されたものであつた。而してこれをヒットラーに進言したものは、國防軍側とナチス内の反レーム派であつたとせられる。

レームはよく其裏面の事情を察していた。そこでレームは六月七日（一九三四年）、彼は醫師の勸告によつて、病氣靜養の爲め暫く閑地につくことを聲明する一方、「わが突撃隊は七月の休養を終れば、八月一日から必ず再び原狀に復する。突撃隊を敵視する一派は、今後再び復舊することはないであらうとか、復舊しても僅に其一部分であらうなぞと、ひそかに祈つているものがあるけれども、彼等は暫時そう喜んでゐるがよい。若し必要とあらば適時適應に彼等は其答を與えられるであらう。突撃隊はドイツの運命であり、また運命として存するであらう」と、全突撃隊の諸將に傳令した。

しかしこれは決してレームが第二革命を計畫しているという陰謀の證據たるものではない。レームはヒットラーに對して不平を抱いてはいたが、叛逆の陰謀を企てたという證據は、今日まで一つも擧つていないのである。尤もレームが突撃隊の中に、政治、經濟等に關する専門の立案機關を設け、また一種の外交部さへ特設して、恰も獨立の政府を樹てたやうな觀を呈し、その爲め黨や政府と衝突したことも、しばしばあつたので、これなぞレームの野心を疑われた種ともなつたのである。またナチ黨内部には、有力な分子中にヒットラーに對し不平なものが多數あつて、是等のものはレームが若し事を起し

たら、ヒットラー側につかず、概ね日和見の態度に出ることも豫想されていたから、こういう當時の黨情不安が、突撃隊の實権を握っているレームを、ヒットラーが危険人物視するようになつたのは、一應無理もないことであつたかも知れない。

三 謀叛の同志

1 シュライヘル將軍

ナチ黨外にあつて、レームと通じて第二革命の陰謀に參畫していると目されたものに、前宰相シュライヘル將軍がいた。彼は夙にレームを知り、また單純な軍人というよりも、寧ろ權謀を事とする天性の陰謀政治家であつたので、ナチスの分裂を利用して、再び權力を得んとする野心を包藏するものと、疑われていたようである。レームの方でも國防軍をかきまわすには、この將軍を利用する價値をよく知つていた。しかも彼はレームと同様の左派で、急進社會主義者であることに、兩人は一致していた。しかし彼が國防軍を手に入れんとするレームの企圖に加擔しているものという事實の證據は認められない。それにも拘わらずシュライヘル將軍がナチ黨に對して抱く反感は、公然且つ露骨であつて、ナチ黨から見れば彼は最大級の危険人物であつた。こういう話が傳えられている。彼は南ドイツの或田舎町の仕立屋で服をあつらえ、或日假縫いの爲め其店の假縫室に入り、ツボンだけで突つ立ちながら、頻に大聲を發して、「この無頼漢の一味」、「この罪人共」、「このけがらわしい男淫賣めら」、「もう此上永くは見えていられない。スグに彼奴等全ギヤングを一掃してやる」などと罵りつづけているので、本人の顔こそ外から見えぬけれど、仕立屋の主人は慄えながら「どうかそんな大きな聲を立てないで下さい」と、なだめすかしてヤット靜めたほどに、猛烈な勢で嘯鳴つたというのであるが、これはヒットラーに對してではなく、寧ろ突撃隊の暴狀を罵つたのかも知れない。また或會合の席で、彼は「無頼漢や、罪人共が今日ドイツを支配しているが、半年内には彼等はキット没落するであろう」と公言したというのは、多分突撃隊を含めてのナチスを罵倒したものであらうと云われる。

當時老病に臥した大統領ヒンデンブルグ將軍の死期は既に迫まつていた。若し將軍が死んだら、ヒットラー内閣は必然大改造せられるに相違ない。宰相ヒットラーの地位は變らぬとしても、副宰相には現任パーペンの代りにシュライヘル將軍が据わり、經濟相にはグレゴール・シュトラッサーが就任し、ヒンデンブルグ大統領の跡には前獨帝の一皇子オーグスト・ウイルヘルムが推戴せられるであろうというような噂が公然行われ出したが、この噂の新聞僚中で、最もナチスを驚かしたものは、レームがいよいよ國防相となることであつた。そしてこの噂は實にシュライヘルから出たものとされたのである。ヒットラーが後日國會で、六月三十日の大虐殺を辯解した演説中に、シュライヘルとシュトラッサーとレームの一團が、革命動亂を企てた首魁であるように云つてゐる其根據は、實にこの信ずるに足らぬ噂であつた。

2 シュトラッサー

右の噂の經濟相に擬せられたグレゴール・シュトラッサーは、レームとシュライヘルに次いで、ナチスの目から第三人目の注意人物であつた。彼は第一次歐洲大戰に志願兵として出征し、中尉となつた。戰場では勳章を頂戴するほどの働きをしたが、戦後暫く藥種商を営んでいる中、一九二一年ナチスに入黨し、後に下ヴァリヤで突撃隊の有力な指導者となつた。一九二三年十一月九日の失敗に終つたミュンヘン暴動に加つたが、彼もまたヒットラーに置いとけぼりを喰わされた。それでも彼はナチスの黨組織を改編するに最も盡力した一人で、これまで南獨ベヴァリヤが専ら中心地であつた黨の勢力を、北ドイツに延ばしたのは、實に彼の努力と功勞であつた。眞の社會主義的ナチ國家論を唱へ出したのは彼であつて、また後年ヒットラーの片腕となり、黨の大領袖ともなつたゲッベルスを、始めてナチスに連れて來たのも彼であつた。即ちゲッベルスは最初シュトラッサーの秘書として採用されて來たのである。だから一時はシュトラッサーに附いて、ヒットラーに反抗したこともあつたが、後シュトラッサーが黨内に勢力を失うを見るや、ゲッベルスは遂に舊主に背いてヒットラーの下に

去つたのである。

一九三一年、黨組織改編に際し、彼は第一政治部の部長となつたが、ヒットラーとの關係は當初から圓滑ならず、黨の重要な問題について、毎度意見が衝突した。畢竟シュトラッサーは急進社會主義の理論家であるに反し、ヒットラーは現實主義のオPPERチュニストであつたからである。遂に最後の衝突によつて、彼がナチスを去つたのは翌一九三二年の暮で、爾來彼は全然政治にたずさわらず、隱退して某化學工場の仕事に従事していた。故にシュトラッサーがレームや、シュライヘルなどと一味して、革命運動に關與したというような疑をかけられる種は、少しもなかつたのである。少なくとも事實の實證を以て立證されたものは一つもない。

3 パーベン

同様に革命陰謀の有力な一味と目された一人にパーベンがいる。パーベンはユンカー出の職業軍人で、第一次歐洲大戰の時ワシントンのドイツ大使館附陸軍武官在職中、米國の軍事工場を爆破する陰謀が露顯して、アメリカから追われるに至つた漢であるが、ヒンデンブルグ將軍に愛せられ、戦後一度は宰相ともなつて、政治的經歷ではヒットラーよりも、また前記シュライヘルよりも先輩であつた。後に第二次世界大戰中、トルコ駐在のドイツ大使として活躍したことは、當時有名であつたが、今ここにヒットラーに對する叛逆の嫌疑を蒙つたのは、彼がまだヒットラー宰相の下に、副宰相を勤めていたときのことである。しかも彼はレームやシュライヘルとは反對に、右派の反動家であつて、殊にゲッベルス嫌いのユンカーの一派や、カトリックの僧侶や、産業家達の間に支持者を持つていてと目指され、彼の右派とレーム、シュライヘル等の左派とが、左右からナチスを挾撃する計畫を目論んでいると、ヒットラー及び其側近の者はいうのである。

それを立證する材料に使われたのが、一九三四年六月十七日、マールブルグ大學で彼のなした極めて大膽な、しかも極め

て輕率な演説であつた。彼はナチスに對して、言論壓迫の暴政を攻撃し、元來ヒットラー總統に忠誠な者が、愛國の至情から批判の言をなすものを、ナチスがこれを國賊呼ばわりして、頻に迫害を加える横暴を痛烈に非難して、言論の自由を力説したのである。これは誰が聞いても立派な正論であつた。ところがこの演説の攻撃目標は、實は宣傳相ゲッベルスと突撃隊の頭目レームであつたのだから、この演説が傳わると、諸方から、殊に産業界の人々から賛成激勵の手紙が殺到し、大統領ヒンデンブルグ將軍の如きは、激賞の祝電を送つたほどである。

しかし苟しくも現在ヒットラー内閣に副宰相たるものの口から、この露骨な攻撃演説を聞いたのであるから、大に人を驚かし、ナチ党内では俄然物論を引き起した。前記の内閣改造必至の噂が傳つたのは、恰もこの時である。パーペンに危険の異心ありとして、ヒットラー側近で騒ぎ出し、彼をレーム等と同列に謀叛人視して、一緒に片づけてしまえと云う口實を作らしめたのは、パーペンが一期の不覺であつた。パーペンがそんな大膽な男でないことは、ヒットラーもよく知つていたのであるから、後日一命だけは助けられた。右の演説中に、レーム攻撃をやつてゐるに徴しても、彼がレーム等の一味でないことは容易に證明せられる。

ヒットラーの身邊を取捲く現勢力數名の者、例えば宣傳相ゲッベルス、空軍相でプロシヤ首相のゲーリング、ヒットラー親衛隊長で秘密警察の長ヒムラー、總統代理のヘス等は、ナチスに對する黨内外の形勢が日に不利で、このまま無策で行つたなら、到底現勢力を維持することの困難であり、早晚不測の變を免かれない情形を觀取して、彼等に反感逆心あるものを、片つばしから一掃してしまわなければならぬとアセリ出した。其反感逆心あるものとして、前記列擧したレーム、シュライヘル、シュトラッサー及びパーペンを、危険人物もしくは注意人物として、是等の者を非常手段に訴えて一舉に盡殺し、以て禍根を絶たんとしたのが、即ち一九三四年六月三十日の朝を期して決行した世に所謂「流血の土曜日」一名「流血の清黨」とて、古今の歴史に稀なる大虐殺である。

そこでヒットラーは六月三十日の拂曉を以て、レーム以下の危険人物を不意に襲うて、一舉に打取る秘密の手立てを決したのである。

四 史上の大虐殺

1 一網打盡の秘密計畫

六月三十日といえ、前記の如く其翌七月一日から、レームの突撃隊の休暇が始まる日である。休暇が始まつて隊の首脳者等を四散するにまかせることは、禍根を絶つ所以でないと考えたので、レームと同時に彼等を一網打盡的に逮捕する爲め、ヒットラーはレームに命じて、六月三十日にミュンヘンに近いウイスジの温泉場に、全國の隊長を召集する命令を發せしめた。ウイスジはレームの常住地である。ここで隊の休暇に關する會議を開けたいのである。よつてレームはヒットラーの名で、突撃隊の諸隊長は、六月三十日午前十時、ウイスジなるレーム參謀長の本部に集合することを命ずる電報を發した。この會議にはヒットラーも出席することになつてゐた。少なくともレームはそう信じてゐた。何ぞ知らんこのウイスジ會合こそ、レームが六月三十日を期し、ミュンヘンとベルリンで、南北相應じて第二革命を起す陰謀の爲に、ひそかに召集したものと、後日ヒットラーによつて誣られる口實に供せられたのである。

ヒットラーがいよいよレームを無きものにする決心をつけて、右の通り決行に着手する準備を始めたのは、六月二十四日頃であるらしい。というのは、翌二十五日以後、國防軍と親衛隊（これは突撃隊中から嚴選した精銳の一隊で、ヒットラーの護衛に當り、突撃隊の服装が茶色であるに對し、黒シャツ、黒服を着用しているのが特色であつた。原名 *Sturmstaffel* の頭文字を取つて、普通 *S.S.* と略稱せられたものである）に、何事か非常命令が發せられたのを、ベルリンの突撃隊長カール・エルンストが聞き出し、彼はすぐ國防相ブロンブルグと空軍相ゲーリングに電話をかけて、何かあるのかと尋ねたに對し、兩人は何にも知らぬ

とトボけていたということである。ところが日ならずして、史上の大虐殺は、國防軍と親衛隊と秘密警察の手によつて斷行されたのであるが、其頃ヒットラーは何に喰わぬ顔して、上部バヴァリアにおり、豫て彼が熱心であつたアルプスを通ずる自動車道路を検分していたので、表面の情形は極めて平穩無事を装うていた。

二十八日と二十九日には、ヒットラーはウェストファリヤとラインランドにいた。即ち二十八日はエッセンで友人の結婚式に臨み、二十九日の夜はラインのゴデスベルグの宿で、同行のゲッベルスと共に、炬火行列の大歓迎を受けて大機嫌であつた。それは實にウイスジューのレームを襲う前夜である。すべて敵をして覺らしめざるヒットラーの周到な用意であつた。だから全然何も知らないレームは、三十日には突撃隊の幹部が全ドイツから、ウイスジューに集まつて會議を開き、ヒットラーも出席するものとのみ信じて、總統の來るのを待受けていたのである。現に彼の同僚の一人で、二十九日にウイスジューを立ち去るものがあつたのを止めて、「あしたまで留まつて居給え、大將（ヒットラーのこと）が來るから」といつたという程に、レームは實際その身に迫まる危難について、全く何にも知らなかつたのである。後にヒットラーは、レームが部下の隊長をウイスジューに召集して、叛逆の秘密會議を開かんとしたのだと、國會で演説しているが、ヒットラーが來るものと豫定された會議で、ヒットラー打討の謀議が相談できるものではない。またバヴァリアの山の中の溫泉場などに籠もつていて、天下取りの陰謀を指圖するような呑氣なことをする筈がない。しかしそうだとしなければ、レームを打取る口實がない。そこでまた後日ヒットラーのいうことが面白い。二十九日の夜泊まつた前記ゴデスベルグの宿で、午前一時ベルリンとミュンヘンから、突然至急警報を受取つた。一つはベルリンで突撃隊が六月三十日暴動を起し、午後五時を以て政府諸官廳を襲撃占領する計畫であると云い、も一つはミュンヘンで二十九日の夜九時、既に突撃隊が事を始めたというのである。

六月三十日の深夜午前二時、ヒットラーは人知れずボンに近きハンゲラール飛行場を立つて、一路東南に向つた。彼と同行したのはゲッベルス外數名であつた。ミュンヘンに着いたのは、夜もホノボノと明けかける午前四時である。着いて見た

ら、バヴァリア内相アドルフ・ワグナーが既に一切の手配をして、同地の重なる突撃隊の幹部を、彼の手で悉く捕縛してあつた。何にも知らずに夜半突然引つくられ、多くは睡氣眼の朦朧たる彼等を、ヒットラーは眼前に引き据えて、大喝嗚鳴りつけた。それから彼等の制服から徽章をモギ取つた上、即刻銃殺を命じた。その間わずかに二時間である。

2 レームの最後

それから自動車を列らね、前後を親衛隊が守つて、目指すレームのいるウイスジーに疾駆したのである。目的地に着いたのは七時であつたが、其日こそ第二革命の叛亂を起すという當日であるのに、レームの泊まつている旅館の別館は、ヒッソリとして全館悉く今正に熟睡の最中であつた。ヒットラーが部下を連れて侵入して見ると、昨夜來の暴飲亂行の跡歴然として、部屋中、杯盤狼藉の亂狀を極めていた。そこで最初につかまつたのが、伯爵と稱する若い一士官であつた。ヒットラーが彼を訊問しかけると、彼は手をポケットに入れて、ピストルを取出すような様子をしたので、ヒットラーは携えた犬用の鞭をあげて、其鞭の尖端に着いている硬い鐵片で、彼の頭部に忽ち一撃を喰わせ、次いで無茶苦茶に顔面を亂打して卒倒せしめた。しかもこの物音に誰も氣附くものはなかつた。

すぐにレームの部屋が見つかつた。ヒットラーは鞭の柄で寢室の戸をたたき、「あけろ」と嗚鳴つた。内からレームは睡むような聲で、「あけるが誰だ」と應じた。「おれだ。ヒットラーだ。あけてくれ」。「なに！ あなたはもうやつて來たのですか、午前中にはいらつしやらないと思つていた」と云いつつ、寝巻き姿で戸をあけた。寢室に突入するや否や、ヒットラーは頭からレームを叱咤して、あらん限りの暴言をあぶせかけた。不意を食らつたレームは驚いてアッケに取られたが、やがて彼もまた大に怒つて、ヒットラーに嗚鳴り返えした。始めて物音を聞いて、旅館の主人が駆け込んで來たときには、レームは既に手錠をおろされていた。長靴を履き、ベルトを締め鞭を携えたヒットラーの前に、レームは引き据えられて、

今日彼の没落と、切迫する死の宣告を與えられたのである。

次ぎはハイネスの番であつた。彼は其時シレジャの突撃隊司令官で、ブレスロウの警視總監を兼ね、レームに次ぐ突撃隊の大幹部であつた。彼の部屋はレームの寢室の眞向うであつたが、侵入されたときはハイネスは少年と同衾していた。彼はブレスロウの警視總監たる官權を暴用して、ナチスに反對する者とユダヤ人の迫害に、有らゆる殘虐の兇暴を振つた冷血漢で、殊に彼が極端な男色漢であることは、當時この蠻風が突撃隊内に一般に行われた其中にあつても、彼は實にその最悪の變態漢であつたと稱せられ、其管下ブレスロウの小學生を強制徴發して、日夜犠牲にしていたというのは有名な話で、ヒットラーもこの事實をよく知つていたのである。そこでハイネスは忽ち室外に引きずり出され、自動車の中に押し込んで、即時射殺された。

斯くてヒットラーの一隊はレーム其他を捕縛して、ウイスジを引揚げ、ミュンヘンへの歸途に就いた。その歸途、突撃隊の幹部が前日の召集に應じて、續々ウイスジに向け車を驅つて來るのを、悉く捕えてミュンヘンへ逆行せしめた。遅れて來たものは、ミュンヘン停車場のプラットホームに待ち構えた親衛隊と秘密警察隊で取り押えた。其中には別の用件で下車したものもあつたが、有無を言わず引立てた。譯をいわんとすると、その場で直に射殺した。

ミュンヘンに着いたら、親衛隊に於ける準備は既に萬端できており、ヒットラーは捕虜の一人々々に刑を宣告した。さすがに彼の顔色はヒドく悪く、聲もまたかれていた。宣告されたものは、同地の古い監獄に入れられ、その監獄の庭で射撃隊の一齊射撃の下に、順々に惨殺されて行つた。この惨殺に當つて、ミュンヘン親衛隊の司令官で警察長官である某は、部下に「これは一體何のことだか、おれにも分からぬが、兎に角みんな殺してしまえ」と命令した。果して幾人または幾十人殺されたか知るものはないが、翌日曜日（七月一日）も、火曜日にも銃聲が絶間なく聞こえた。すべてが豫て用意された人名簿によつて行われたものである。「總統の命令だ。ヒットラー萬歳！ 打て！」というのが合圖であつた。

この間レームは同じ獄舎の地下にすわつていた。この獄舎こそ、十年半前彼が一度暗い日を送つた所であつた。一九二三年十一月九日、ヒットラーの陰謀に加わつて、ミュンヘン暴動に失敗し、同志ヒットラーやゲーリングに置き去りされて捕えられ、彼のみ一人ここに投げ込まれたのであつた。今日また再び同じ獄舎につながれて、轉た當年の舊事を思い出すこともあつたであろうが、殆ど其暇もなく、早速ヒットラーの命令だといつて、彼に一挺のピストルを與えられた。ヒットラー總統の情けによつて自殺を許すという意味である。レームは斷乎として拒絶した。「アドルフ（ヒットラー）がおれを殺そうとするのなら、自分で來て打て」と答えた。十分後、彼は引き出されて壁に向つてすわらせられた。「打て！」という一聲とともに、彼の體は忽ちグッタリと崩れた。

突撃隊（それは兇暴を極めたギャングではあつたが）の創立者であり、ナチ黨の有力な共同の創立者であり、ヒットラーの多年の盟友であり、ナチ國家の建設者であつたエルンスト・レームは、斯くして無慙な横死を遂げたのである。彼を銃殺した士官は、其勇敢を賞せられて、後日進級した。

3 餘類の殺戮

それから殘黨が次ぎ次ぎに殺されて行つた。

突撃隊にも、ナチスにも全然無關係のもので、容赦なく殺された。其中で最も悲惨なのは、會てバヴァリアの首相で、今は齡七十三の老人であるグスタフ・フォン・カールが、寝巻きのままベッドから引き摺り出されて、數日後むごたらしく慘殺せられた屍體が、ミュンヘンから遠からぬグッヒョウ附近の沼の中に發見されたことである。十年半前ヒットラーのミュンヘン暴動が失敗したのは、この老首相の爲であつたという舊怨に對する復讐であつたのだ。

ミュンヘンだけで百二十三人も殺されたと傳えるものがある。

一方ベルリンでは、ゲーリングとヒムラーの手で、時を同じうして大虐殺が行われた。ベルリン郊外の監獄の庭で、終日銃聲の起るのを聞いた。其犠牲者の大物は、ベルリン突撃隊の司令官で、先年ナチスの共産黨退治の一計略たる國會議事堂放火事件に、實際の火付け犯人だつたカール・エルンストと、其當時の一味であつた。彼等は當年の悪事の秘密を一番よく知るものであつたから、ヒットラーは此機會に禍根を一掃せんとしたのである。ところでそのエルンストが掴まえられたのは、ブレーメンとブレメメルハーフェンの間で、それは彼等夫妻が北大西洋のマデイラ島に海上旅行する目的で、ブレーメンへ向け自動車を走らせる途中、親衛隊に追捕されたのであつた。夫人と運転手は其場で負傷し、彼は打ちのめされて人事不省に陥つたのを、ベルリンに連れ戻されたのである。エルンストは最後まで其殺される譯を知らず、「おれは身に覺えないことだ。ヒットラー萬歳。ドイツ萬歳」と叫んで倒れた。同時に彼の副官二人の大尉も銃殺せられた。それで有名な議事堂放火事件の秘密を知つたものは、四五人もしくは六人だけ生き残る勘定になつた。その内の四人はヒットラー自身と、ゲーリングとゲッベルスとヘルドルフという漢である。右のエルンストの手下の一人が逃亡したというから、この者と他にも一人位あるので、結局六人しかなくなつたことになる。このエルンストが生前書き遺して置いた放火事件の秘密文書(これはゲーリングとゲッベルスをひどく攻撃したものであつたという)を、後一九三四年即ちこの大虐殺の行われた同年のチョックと前、パリの半共産主義の某書店から出版されたが、ナチスの秘密警察は大虐殺の當日、その文書を手に入れんと極力手段を盡し、關係者と信ずるものを逮捕したけれど、遂に發見されなかつた。

同日午後一時半、五人の秘密警察の一團が突如グレゴール・シュトラッサーの家を襲うた。シュトラッサーは其時家族と午餐中であつたが、警吏が彼を連行せんとしたので、その故を詰つた處、謀叛の嫌疑によつて彼の事務所を捜査するから、一緒に來いというのである。事務所とは前にも記したように、彼は先きに政事から退いて、今は或化學工場に關係していた其事務所のことである。そこへ行くと、待つていた親衛隊の一隊に身柄を引き渡された。それから後、彼はどうなつたか知

るものもなかつたが、翌日曜日(七月一日)ベルリン郊外の或森の中で、残酷にもなぐり殺されていた屍體が発見された。シュトラッサーはヒットラーやゲーリングとは、生前最も親しい友人で、彼等は彼の家に何百回往き來したかも知れず、殊にヒットラーはシュトラッサーの双生児の名付け親でさえあつた程の親密な間柄であつた。

一週後の七月七日に至り、シュトラッサー夫人の許に、「第十六號」と書いた一つの壺がとどけられた。それには「グレゴール・シュトラッサー、一八九二年五月卅一日、ガイゼンフェルトに生れ、一九三四年六月卅日死す——ベルリン國家秘密警察本部」と附記されてあつた。その壺の内にシュトラッサーの屍體の灰が入れてあつた。彼の死は秘密に附されて、公表するを許されず、新聞に死亡廣告することを堅く禁ぜられた。

シュトラッサーの顧問辯護士某も其法律事務所で殺された。シュトラッサーが最近ヒットラーと不和となつたから、この辯護士にヒットラーやゲーリングやゲッベルス等との從來の關係書類を預けていたのを、ナチスに渡すことを拒んだ爲であつた。またシュトラッサーの片腕だと稱せられたものに、某中尉なる漢がいた。彼も自動車で連れ出され、途中路上に放り出された。彼は第一次歐洲大戰で十五度も負傷し、勇敢を以て士官に取り立てられた程の、ドイツ陸軍にあつても稀有の勇士であつたが、今その逃げ出さんとする所を、背後から五發の弾で打倒し、血まみれになつたまま棄て置かれた。ほど經てイキを吹きかえし、數時間後たまたま通りかかつた自動車に救われ、それからスイスへ逃亡した。も一人シュトラッサーの輩下第一の人物に某博士というのがいた。彼はミュンヘンの自宅の戸口で打たれ、病院で死んだ。斯くしてヒットラーの敵視したシュトラッサーと其身邊の一切が、同時に片付けられたのである。

危険人物シュライヘル將軍が殺されたのは午後四時頃で、將軍のベルリン郊外の別邸に、ゲーリング部下の親衛隊が、自動車で乗りつけてから僅に數分間後であつた。玄關のベルが鳴つたので、將軍夫妻が來客と思つて迎えに出た瞬間、兩人は忽ち打ち殺された。將軍は即死し、夫人は二時間後病院でイキ絶えた。ゲーリングは翌日外國新聞記者に語つて、シュライ

ヘルが逮捕に向つたものに逆襲したからであると辯解したのであるが、この辯解は夫人まで殺した理由を説明するものではない。これに反しシュライヘル將軍の舊同僚たる國防軍の將軍達が、ヒンデンブルグ大統領に宛てて、シュライヘルの名譽回復と彼夫妻を殺した犯人の處罰を要求した書簡中に記する所によれば、「四人の來客が應接間に通されシュライヘル夫妻が入り来るや、一言の挨拶も警告もなく、イキナリ射殺した」というのである。シュライヘル夫妻の横死については、このように新説區々であるが、しかし彼等がヒットラーの手の爲に慘殺された事實だけは明白である。

シュライヘルは野心家でもあり、また陰謀家でもあり、更にナチスに對し痛烈な憎惡心を抱いていたことは間違いないが、彼が當時レームなぞと通じて、革命の謀叛を企てていたという確證は擧がつていない。だからそれから六か月後の一九三五年一月三日、ドイツ陸軍の重なる將軍達がベルリンに集まつて、彼の爲に冤を雪ぎ、彼の死は怖ろしい間違ひであつたと、追悼されたことに徴しても、ヒットラー等がかねての宿怨あるものを、この機會に鑿殺したものであることがわかる。

かねて宿怨あり、または邪魔物視したシュライヘルや、シュトラッサーや、レームなどの大物三人は、かくて一擧に打盡したのであるが、も一人のパーペンに對してはそうは行かなかつた。

前に述べた六月十七日のマールブルグ大學の講演は、ナチスの怨を買うに十分であつた。そうでなくとも黨外から入つて副宰相たるパーペンは、ナチスに取つては大の厄介物であつた。事の序に彼を除こうとするのは必然である。そこで當日彼もまたゲーリングとヒットラーの命令で、親衛隊に襲われた。其わずかに難をのがれたのは、ヒンデンブルグ大統領と國防軍の干渉によるものである。その代わり彼は自宅に監禁せられて、堅く外出を禁じられた。しかし彼の爲に前日マールブルグ大學の講演を起草したエドガー・ユングは、その故を以て殺された。其他パーペンの輩下で、射殺され又は逮捕されたものが、少なくとも六七名はあつた。パーペンのみ一命を助かつて、最後に第二次大戦中、トルコ駐在の大使として活動した

ことは既に一言した。ドイツ敗戦後、彼はニュルンベルグの戦犯裁判にかけられたが、結局放免せられ、更に後年(一九四九年)非ナチ裁判に於ても、控訴審で無罪となつた。

パーペンの外に、いま一人助かつたものは、革命成功の曉、攝政に推戴せられるという先きの噂の主人公オグスト・ウイルヘルム親王である。親王はゲーリングから召喚された。驚いたが逃げもならず、おそるおそる出頭すると、ゲーリングは親王の顔をさも輕蔑の目付きでジツと睨み、「これまで見た中で一番馬鹿ヅラをしている」と先ず罵倒した。親王はだまつているに限ると思つたので、相手にならなかつた。するとゲーリングはレーム一派の陰謀だと稱せられる例の内閣改造案の閣員表を出して見せた。それには既記の通りに親王が攝政になることになつてゐる。次ぎにゲーリングは「エルンスト(前記カール・エルンストのこと)と友人か」と尋ねるから、親王は「そうだ」と答えると、「エルンストと最後に話をしたのはいつだ」「いついつだ」「では何處でどうして話したか」「電話で」「何を話したか」「エルンストがマデイラに旅行するので、暇乞いをいつただけだ」と答えたら、ゲーリングは「あなたは本當のことをいつたので仕合わせだ」と言いつつ一臺の蓄音器を取り出した。それは親王とエルンストの其時の會話を盗聴したレコードを入れたものであつた。ゲーリングは語を改めて、「あなたが内閣改造の閣員表に關係があるとは信じない。しかしあなたは數日中にスイスに行きたいでしょう」と思ひがけないことを言ひだしたので、親王はそんな考はないと答えた處、ゲーリングは尙も「私は先刻あなたが世界で一番馬鹿ヅラをしているといつたが、勿論あなたは暫くスイスに行きたいでしょう」と、謎のようなことを繰返している。で、親王は始めて彼の意を悟り、次ぎの汽車で出發した。これはゲーリングが人を助けた恐らく唯一の例かも知れない。

以上はただ著名人の虐殺され、又は迫害されたものだけを擧げたに過ぎぬが、この大虐殺は六月三十日(土曜日)の朝から次週へかけて、ドイツ全國に亙り各地到る所で行われた。殺されたものの實數は今に至つて尙あきらかでない。其中最も亂暴な話は、その頃音楽評論家として多少の名を成していたミュンヘンのウイリー・シュミットという者の屍體が、突然

その妻の許にとどけられた。とどけに來た警官が頻に陳謝しているのを聞けば、同名の人物が銃殺人名簿中にあつたので、間違えて打殺したというのである。個人的怨恨や、憎悪や、猜疑で親衛隊の手にかかつたものに至つては、幾百人あるか分らない。

さすがのヒットラーも餘り藥が利き過ぎたのに驚いた。その犠牲者中には、彼が思いも寄らぬ人、また生かして置きたいと思つた人も、多々いたからである。そこで彼は三十日の夜、ベルリンに飛んで歸り、この上の虐殺を中止せしめた。二日後また飛んでシレジャとサクソニーに急行し、中止を嚴命した。それで助かつたものに、サクソニーの首相フオーン・キリナーがいた。ヒットラーは現場に駆けつけて、「止める、もう撃つな」と叫んだ程であつた。

當時の状況は正しく殺人鬼の横行で、誰が何時どこで殺されるかも知れない恟々たる恐怖の人心であつた。だからこの土曜日の夜、町で行き逢う人々の挨拶に、「まだ生きているね」(Nebst du noch) という言葉が交わされた。その頃ベルリンに駐在した米國大使の一女マルタ・ドッド (Martha Dodd) の著書 (My Years in Germany, p. 133) に書いているのを見ても、人心の非常な不安を察するに足る。三百六十餘年前、パリの全都で三日三夜に亙つて行われたサン・バルトロメオの大虐殺以來の大慘事であつた。

五 この大虐殺の讚美

この大虐殺の蠻行は、六月三十日土曜日の朝から、翌週の七月二日月曜日まで及んだのであるから、三日に亙り全國に及んで行われたのである。無論ミュンヘンとベルリンで殺されたものが最も多かつたのであるが、前後果して幾百の有名無名人が慘殺されたかわからない。後日ヒットラーは國會での演説に、僅々七十七人だといつているけれど、實數は八百乃至一千六百に上るのであらうと推算するのが多數説である。

假りにそれが僅々七十七人だとしても宜しい。一體ヒットラーは如何なる國法上の權能あつてこの大虐殺を行うことを得たのであるか。當時彼はドイツ國宰相ではあつた。しかし大統領ヒンデンブルグにしてもが、そんな亂暴な權力は持つていない。全然裁判にもかけず、謂う所の謀叛の事實の有無をも確めることなく、ヒットラーの手兵で、ナチスの私兵たる親衛隊をして、主として虐殺に當らしめ、秘密警察をしてこれに手傳わしめたのである。當日ミュンヘンのナチス本部から、この非常手段の止むを得なかつたという聲明書を發表し、レームの第二革命の陰謀に、一切の罪を嫁したのであるが、その陰謀を實證する事實は一つも示されなかつたのである。否なドイツの諸新聞は其ナチスたると非ナチスたるを問わず、ヒットラーを以て最も偉大な英雄であるとなし、黨の爲め又ドイツ國の爲には、彼が最良最舊の友人をも敢て犠牲にすることを躊躇しない最高格の人物であると、讚美絶稱を極めたのである。ヒンデンブルグ大統領でさえも、ヒットラーとゲーリングに宛てて、「決然たる氣力と勇敢なる行動を以て」叛逆の一味を撃滅し、「ドイツ國民を重大な危険から救うた」ことを感謝する祝電を送つたと、放送局は全國に放送したのである。

殺されたシュトラッサーに一對の双生児がいた。前記したようにヒットラーは彼等の名附親であつて、彼等はヒットラー少年隊にも加わつていた。或フランス人で、シュトラッサーの隣家に住んでいたものがあつた。父シュトラッサーが横死を遂げた數日後、街でこの双生児の一人に遭つたとき、不惑に思つて慰めてやつた。試みにヒットラーについて今はどう思つているかと尋ねたところ、この兒は用心深くそのフランス人の顔を見つめていたが、「やつぱりヒットラーは我々の總統だ」と答えた。子供でもウツカリ物は言えぬことを知つていたのである。

七月一日、ウェスト・ドイッチェ・ベーバハターの社説こそ、自由のないドイツ國民の卑屈の實情を代表するものであつた。其論旨の要は次ぎの通りである。

「これに比較すべき事態は、全歴史を通じて見られないことであつた。指導者が其個人的感情を、ヒットラー總統のよう

に完全に没却した例は、曾てないことであり、また政治家が國民の幸福の爲に、ヒットラー總統のように全身を打込んだ例も、曾てないことである。アレキサンダー大王も、古代史に於ける一切の皇帝君主も、ボナパートも、フリードリヒ大王と雖も、これに似たようなことは何もなさなかつた。我々が現に目撃したような超人的指導者に匹敵するものは、今後も斷じて出ないであろう。人々は將來も亦これまでの通り、人々の血管の中に脈動する時勢の精神を以て、我ヒットラー總統の指導に従わねばならない。それは彼の犠牲の莫大なることを認識する所以であり、彼が其多くの舊友、しかも其多くは素晴らしい經歷を持つた舊友を射殺することを命ずるに至つた苦衷を理解する所以である。我々は斯人と其無比なる自己犠牲に畏服する。この嚴肅な緊張した瞬間、我々はすべての人間の弱點と過失を改めることを誓うものであるが、昨日流された血は、我々のすべてを清めるであろう。それは我々の立派な運動を純潔にする爲に必要な運命に捧げる犠牲である。」

何百人の無辜の男女を、一舉に虐殺した蠻行を以て、アレキサンダー大王も、ナポレオンも、フリードリヒ大王も爲し得なかつた美德だとして、ヒットラーを超人的指導者などと褒め奉るに至つては、卑劣卑屈言語道斷の限りであるが、しかし當時ヒットラー政權の暴虐無道の壓制治下に在つては、新聞はこんなことでも云うより外はなかつたであろう。我東條軍閥の專横時代に於て、英雄東條を謳歌して、ひたすら彼に阿附迎合した我言論界の實情を顧みるときは、決して當時のドイツ新聞の卑屈を笑う譯には行かない。壓制暴力政治の下に於ては、どこの國でもまたいつの世でも、一切批評の自由はないからである。

六 この大虐殺の合法

虐殺を完了した七月三日、ヒットラーは閣議を開いて、一の法律を發布した。「六月三十日、七月一日及び二日、叛逆の

行爲を鎮壓する爲に取られた手段は、國防上必要な處置として合法とする」というのである。

それから十日を経た七月十三日の夜、國會がクロル・オペラに召集せられた。ヒットラーはそこに臨んで、歴史に残る「血なまぐさき土曜日」の最終的辯明演説をしたのである。それは一時間半に亙り、鐵拳を振りまわしつつ、荒れ狂うた激越狂亂の極を盡したものであつた。しかも其内容は所謂革命の叛逆について、徹頭徹尾、作り事だらけのものであつた。レームとシュライヘルとシュトラッサー三人を謀叛の張本人として、痛烈に攻撃したのであるが、終始一つとして事實の確證は擧げられなかつた。それは多年フランクフルター・ツァイツング紙の通信員であつたコンラッド・ハイデン (Konrad Heiden) が、その著「ヒットラー傳」(Hitler, a biography)中に評していうように、全演説中、ヒットラーは證據も、證明も、文獻も何一つ提示せず、どの事項についても、時間と、關係者と、證人を伴うた具體的立證をしたものがなく、其いふ所は悉く矛盾だらけで、申さば嘘八百の拵え事を、出鱈目に並べたものに過ぎなかつた (P. 335)。そして其演説の最後に至つて、

「この期間、余はドイツ國民の運命に對して全責任がある。それ故にドイツ國民の最高裁判所は、この二十四時間、余自身で構成せられた。」

という古今未だ曾て聞いたことのない驚くべき珍説を吐いたのである。ヒットラーが自ら最高裁判所であつたというのは、その裁判はヒットラーが勝手に發した死刑の命令の宣告であり、しかも其死刑はヒットラー自身が自らの手で執行したのである。それは國家の立法權と司法權を、ヒットラー一身に掌握壟斷したということになる。古代の獨裁專斷の壓制暴君は皆これであつた。ところが面白いのは、さすがにヒットラーはこれに時間的制限をつけていることである。二十四時間だけそうだつたと云うのである。堅白同異の強辯を以てしても、これは頗る窮した辯解であつた。しかもナチ政權の下に於ては、これが其まま通用したのである。獨裁專斷の壓制政治に於ては、生命の安全を託すべき國法もなければ、これを保護す

る獨立の裁判所もない。一ヒットラーの命令が直に國法であつて、一ヒットラーの獨斷が即ち裁判であつた。「まだ生きてるね」という街頭の挨拶語は、ヒットラー專制前後實に十餘年に亙るドイツ國民の生活の實情そのものであつた。

この演説に於てヒットラーが發表した殺人の數は、僅に左の七十七名であつた。

| | |
|--|----|
| 突撃隊の上級隊長 | 一九 |
| 突撃隊の他の隊長及び隊員 | 三一 |
| 親衛隊で謀叛に加擔した者 | 三 |
| 突撃隊の隊長、及び隊外の普通人で抵抗した爲め殺された者（この内にシュライヘル將軍夫妻が含まれるものと推測される） | 一三 |
| ナチ黨員であるが突撃隊員でない者（この内にシュトラッサーが含まれるものと推測される） | 五 |
| 保護の爲め逮捕して置いた者を虐待した親衛隊員 | 三 |
| 自殺した者 | 三 |
| 計 | 七七 |

と數だけは読み上げたが、其姓名は一人も發表しなかつた。しかもこの數字は決して實數ではない。實數は發表數の何倍、いな十何倍にも上ほつていと云うに於て、諸説は一致している。「ヒットラーを知つていた」(I Knew Hitler)の著者ケルト・リュデッケ(Kurt Ludecke)は、八百乃至一千二百だと言ふ(P. 776)。「ナチ獨裁政治」(The Nazi Dictatorship)の著者フレデリック・シューマン(Frederick Schuman)の如きは、一千百八十六名に及んでいと斷言してゐる(P. 443)。ヒットラーの演説が嘘八百で固められている事實に徴し、彼が擧げた數字の信ずるに足らないのは云うまでもない。獨裁專斷政治は嘘を公然且つ平氣でいう政治であり、嘘を國民に強いる政治であり、嘘が其まます通る政治である。これは其嘘に對して眞實を公言する自由を、國民から奪い取つた政治だからである。しかもこれは獨りヒットラー治下にあつた當時のドイツ人だけが經驗したことはない。

凡そ獨裁專斷の政治が行われるところでは、壓制の非を掩う爲に、常に國民から眞實を隠くし、いつでも平氣で嘘をつ

き、嘘を使い、其嘘を信ぜしめんとし、其嘘を國民に強制する爲に、更に多くの嘘をつき、更に甚だしい嘘をばうて、飽くまで嘘を國民に強制する其結果、上の意を迎える國民は、嘘と知りつつ嘘を信じ、もしくは信ずる如く装うて、上下ともごも嘘を語り、互に偽わり互に欺き、いつか無恥卑劣の國民性を成して、頽廢墮落して行く民族の運命は、淺ましい限りであるが、日本國民も曾て一時は同様の運命に瀕した覚えのあることを隠くすを得ない。

ヒットラーはドイツだけにいるのではないのである。